

奈良女大家政 ○緑川知子

登倉尋実

目的 本実験は、寒冷環境における帽子の温熱生理学的意味を明らかにする目的で企画された。

方法 7人の女子学生を対象として、環境温18℃、相対湿度60%の前室にて予め、深部体温が一定のレベルに達した後、環境温10℃の人工気候室に入室し椅座安静を105分間保った。最後の5分間は顔面前方より扇風機を用いて風速 $2.40 \pm 0.03$  m/秒の風を当てた。人工気候室入室後、着帽する場合としない場合に付いて、温熱生理反応並びに精神作業能率を測定した。

結果 寒冷暴露後の鼓膜温、頭部皮膚温、前額部皮膚温のレベルは、無帽時には着帽時に比して有意に低くなり、これらの傾向は有風時に特に著明に認められた。これらの事実について、温熱生理の立場から考察を加える。寒冷暴露による精神作業能率の低下は、着帽により抑制される傾向が認められた。

なお、本研究は、1989年度科学研究費補助金（一般研究C）の一部によった。